

## 水を用いた建築設計の方法論に関する研究

—安藤忠雄と谷口吉生の建築作品を対象として—

A Study on methodology of architecture making use of water

-For architecture designed by Tadao Ando and Yoshio Taniguchi-

○吉澤果南<sup>1</sup>, 小海諄<sup>2</sup> 畔柳昭雄<sup>3</sup>, 菅原遼<sup>3</sup>

\*Kana Yoshizawa<sup>1</sup>, Jun Koumi<sup>2</sup>, Akio Kuroyanagi<sup>3</sup>, Ryo Sugahara<sup>3</sup>

Abstract: To clarify the design method of architecture making use of water for works of Tadao Ando and Yoshio Taniguchi who are designing many buildings using water. Because many art museums are designed, we grasped how water is used in art museums. By including the cross section configuration 2, we could connect the inside and outside of the building. we thought that we can connect the premises and cities by including 6 and not including 2. In addition, there are various ways of watching the ocean. In this paper I thought that we can recognize nature again when used for galleries and terraces, and that when used in lounges we can strongly impress the ocean.

### 1. はじめに

近年、我が国では、水を用いた建築作品が増えており、水面特有の知覚的操作により、建築空間を創出しているものが見られる。特にその設計者は、建築空間に水を取り入れる際には、さまざまな設計意図のもとに水を用いていることが考えられる。

そこで本稿では、水を用いた建築作品を比較的多く設計している安藤忠雄と谷口吉生の作品を対象に、水面の規模、水の性質、平面構成、断面構成、設計意図を把握し、それらを比較することで、2人の水を用いた建築作品の類似性、特異性を明らかにすることを目的とする。

### 2. 調査概要

対象建築作品を Table1, 対象建築作品の用途種別の割合を Figure1 に示す。本稿では「新建築」(1977年2月号～2016年12月号)に掲載された、2人の建築家が水を用いて設計した建築作品を対象とし、52件を選定した。

水を用いた建築作品の用途種別に着目すると、どちらの建築家とも美術館の事例が多くを占めていたため、本稿では美術館を対象に設計手法を把握した。

### 3. 調査結果

#### 3-1. 断面構成からみた設計意図

建築物と水面の関係から平面構成と断面構成を分類すると、平面構成を7タイプ、断面構成をタイプに分類でき、平面構成はF(敷地外に水面がある)断面構成は1(水面を望む)が多く見られた。美術館の構成要素及び

Table1. Target architecture

安藤忠雄の作品	27 兵庫県立美術館 芸術の館
1 TIME' S	28 国際芸術センター青森
2 下町唐座	29 ビカデリー公園
3 水の教会	30 フォートワース現代美術館
4 兵庫県立こどもの館	31 ホンブリイッヒ・ランゲン美術館
5 名画の庭	32 ロック・フィールド神戸ヘッドオフィス
6 姫路文学館	33 県立ぐんま昆虫の森 昆虫観察館
7 本福寺水御堂	34 絵本美術館 まどとそのそのまたむこう
8 TIME' S II	35 地中美術館
9 熊本県立装飾古墳館	36 さくら広場
10 直島コンテンポラリーアートミュージアム	37 坂の上の雲ミュージアム
11 大阪府立近つ飛鳥博物館	38 秋田県立美術館
12 京都府立陶版名画の庭	39 上海保利大劇場
13 兵庫県立木の殿堂	40 真駒内滝野霊園頭大仏殿
14 サントリーミュージアム天保山	
15 成羽町美術館	谷口吉生の作品
16 大山崎山荘美術館	41 土門拳記念館
17 直島コンテンポラリーアートミュージアム・アネックス	42 東京都葛西臨海水族園
18 越知町立横倉山自然の森博物館	43 長野県信濃美術館・東山魁夷館
19 TOTOセミナーハウス	44 豊田市美術館
20 織田廣喜ミュージアム	45 葛西臨海公園展望広場レストハウス
21 エリエールスクエア松山ゲストハウス	46 東京国立博物館 法隆寺宝物館
22 FABRICA(ベネトン・アートスクール)	47 広島市環境局中工場
23 淡路夢舞台	48 香川県立東山魁夷せとうち美術館
24 南岳山光明寺	49 鈴木大拙館
25 大阪府立狭山池博物館	50 加賀片山津温泉 街湯
26 アルマーニ・テアトロ	51 京都国立博物館 平成知新館
	52 ニューヨーク近代美術館

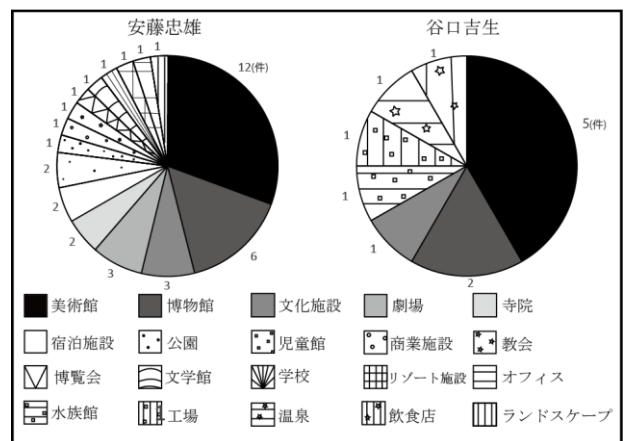


Figure1. Number of target architecture by purpose

1 : 日本大学・学部・海建 2 : 日本大学・院(前)・海建 3 : 日本大学・教員・海建

No	建築面積 (㎡)	水面積 (㎡)	割合 (%)	位置	眺望	水の性質	平面構成	断面構成	凡例 (建築物 □ 水面 ■ ↑アプローチ)	
									平面構成	断面構成
10	693.1	-	-	海	テラス	広がる	F	1	A	1
12	212.2	1142.32	538.32	水庭	ギャラリー	流動的	E	5		
14	3983.83	-	-	海	ギャラリー、ルーフテラス	広がる	F	1	B	2
15	1601.08	1983	123.85	水庭	アプローチ	静止	A	2,6		
16	700.84	197.88	28.23	池	階段室	流動的	C	6	C	3
20	210.05	-	-	池	エントランス	広がる	F	1		
27	13807.71	-	-	海	レストラン、ラウンジ	広がる	F	1	D	4
30	9240	6440	69.7	池	エントランス、ロビー、レストラン	静止	D	2		
31	1860	1632	87.74	水盤	アプローチ、ロビー	静止	A	2,6	E	5
34	492.07	-	-	海	閲覧室、エントランスを抜けてすぐ	広がる	F	1		
35	34.98	-	-	海	丘の上	広がる	F	1	F	6
39	1977.21	619.92	31.57	水庭/堀	ラウンジの向かい/アプローチ	静止	A	1,2		
41	1762.93	15485.26	878.38	人工池	アプローチ、中庭	静止	C	2,4,6	G	6
43	1093.09	606	55.44	池	中庭	静止	B	2,6		
44	6194.67	3766	60.79	水盤	アプローチ	静止	A	6		
48	715.16	-	-	海	ラウンジ	広がる	F	1		
52	7310	154.65	2.12	水盤	中庭	静止	G	3,6		

Figure2. Patterns of components in museums

そのパターン分けを Figure2 に示す。これを見ると、No15,31 は構成要素が一致しており、安藤忠雄は、No15 について『各展示室の間には水の中庭、庭に囲われた屋外彫刻庭園、高さ 9m の吹き抜け空間というそれぞれ特徴をもった巨大なヴォイドが配される』、No31 について『日本の伝統的な建築手法である「縁側」のような緩衝領域をめぐらしている。』と述べている。このことから、水面を利用することにより内外の中間領域を生み出すことを意図しているものと思われる。

さらに、No15 について『建物に水や緑を取り込み、内部空間を立体的につなぐ。』、No31 について『美術館内部に居ながら森の中を歩いているような、内外空間の流動性を期待した』と述べている。このことから、水面を利用することによって、建築内部が建築内外をつなげることを意図しているものと思われる。

谷口吉生は、No15,31 と類似した構成要素を持つ No44 について『外部の設計において共通する方針は敷地の自然や都市や空間と一体となった環境としての建築を意図することである。それは、単に建築を敷地に調和させることではなく、作庭を行ったり、広場を設けたりして敷地の特徴を際立たせ、積極的に周辺環境を創造すること。』と述べていることから、水面を利用することで、敷地内外をつなげることを意図していることがわかる。

### 3-2. 海の眺望からみた設計意図

No10.14.20.27.34.35.48 に着目すると、眺望以外が一致しており、海の眺望に一定の傾向が見られないこと

から様々な使い方が存在することがわかる。安藤忠雄は、No10 について『このような豊かな環境の中で自然と芸術を楽しみ、都会の生活で失われがちな感性を取り戻していくに違いない。』と述べていることから、ギャラリーとテラスにまで海を開くことで、建物内に景色を導き自然を再認識させることを意図している。

また谷口吉生は、No48 について『来館者は、ギャラリーで作品鑑賞の後、ラウンジに出て初めて海への眺望に接することで、前方に展開する画家の発祥の地、櫃石島へ向かうビスタがより強く印象付けられる。』と述べていることから、海を眺望させることで印象に残すことを意図している。

### 4. おわりに

美術館において、どちらの建築家も水面を用いることでつなぐこと意図しており、特に安藤忠雄は水面を建築物に引き込み敷地内をつなげ、谷口吉生は水面を用いて敷地の自然と都市をつなぐ違いがあることが分かった。また、安藤忠雄は海を自然をとして扱う。一方、谷口吉生は海を印象付けの装置として用いている違いのあることが分かる。

### 参考文献

- [1] 安藤忠雄, 新建築, 第 80 巻 1 号, pp.70-83, 2005 年 1 月
- [2] 谷口吉生, 新建築, 第 71 巻 1 号, pp.99-119, 1996 年 1 月